■資料紹介■

甲府城下町遺跡出土「古くぶんじ　田中屋」銘の汽車土瓶

依田　亮一・宮川　展夫

はじめに

平成三〇年（二〇一八）に山梨県甲府市の甲府城下町遺跡で行われた発掘調査で、中世・近世・近代におよぶ様々な時代の遺構や遺物が密集して発見され、このうち近代の溝跡から「古くぶんじ　田中屋」銘のある汽車土瓶が七個体まとまって出土した。調査を担当された帝京大学山梨文化財研究所の宮澤公雄氏から遺物に関する情報の照会を受けた国分寺市では、当時、何も手がかりを掴んでおらず、歯切れの良い返答が出来なかったことから、令和二年（二〇二〇）発行の発掘調査報告書では、「中央線の国分寺駅において販売されたものであろうが…（中略）…詳細を明らかにすることはできなかった」と総括された（宮澤二〇一八）。その後、令和六年度（二〇二四）から着手している新たな市史編さん事業で、「田中屋」に関わる僅かばかりの情報を得ることができたので、甲府市内の遺跡から出土した汽車土瓶を通じて国分寺駅にかかる近代史の一端について触れてみたい。

一．「古くぶんじ　田中屋」銘を伴う汽車土瓶

同遺跡は、武田氏滅亡後に築城された近世城郭の舞鶴城（国史跡甲府城跡）を中心に東西一・八㎞、南北二・二㎞の範囲に広がる遺跡である。汽車土瓶が出土した丸の内二丁目一七―一地点は、JR甲府駅南口ロータリーの西脇に接し、周辺は山梨県庁をはじめとしたオフィス・官庁街の中心域一帯に相当する（図1）。発掘調査では中世の井戸、近世の溝跡・暗渠・土坑・ピットのほか、明治時代の塀・溝跡等が検出されたが、このうちSD〇一と呼称する溝の覆土中から、陶磁器類、土器類、ガ

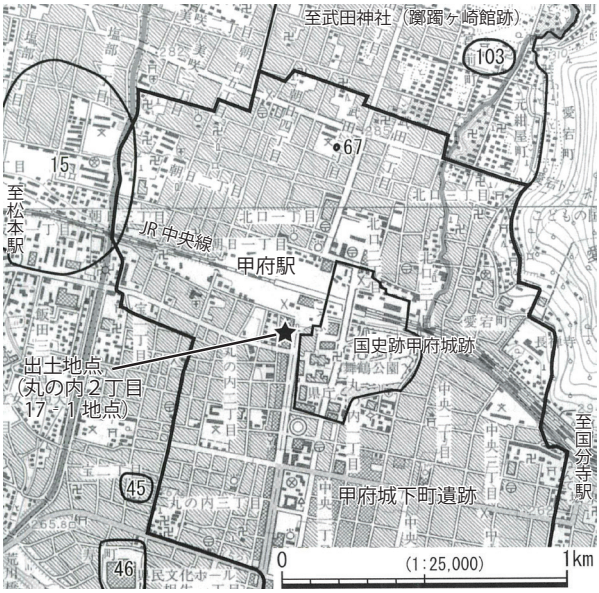


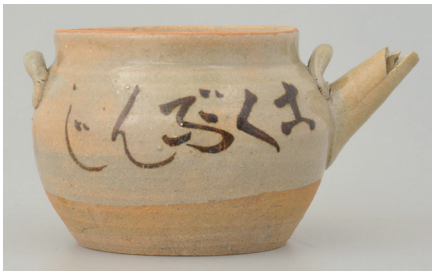
図1　汽車土瓶出土地点（宮澤 2018 に一部加筆）

ラス製品、鉄製品をはじめとする遺物に混在して、鉄道に関する汽車土瓶、箸、経木（きょうぎ）などが出土し、これらの多くはかつて同地に所在した甲府監獄署が廃止・移転する際に、溝を埋め戻す目的で一括廃棄されたものであった。

出土した汽車土瓶は、いずれもロクロ成形による陶器製で、胴部は最大径一〇．六～一一．〇㎝、器高は七．五～七．八㎝を有し、容量は二合仕様である。外面口縁部から胴部下半にかけて灰オリーブもしくは橙・明黄褐色の灰釉を施し、肩部付近に鉄絵具を用いて手書きで左向きに「古くぶんじ」・「田中屋」の文字を表裏面に記す（図2）。汽車土瓶は駅弁と共に販売されたお茶を入れるための容器で、土瓶の外面には駅名と弁当店の名前が書かれるため、文字通り国分寺駅で駅弁を販売した田中屋を示している。七個体の土瓶は発色する釉調に個体差がみられるものの、粘土紐を肩部に貼り付けた弦を吊るすための「耳」は注ぎ口の上部と口縁部を挟んで一対に配し、口縁内側には「キ」と称する蓋受け用の鍔が一周巡り、注ぎ口の内面側で「ス」と呼ばれる茶こし用の穿孔は三穴で、底部はあげ底を呈するなど、器形はどれも共通した特徴を備えている（図3）。なお、底部には火を受けた影響か、煤が付着する個体も含まれていた。

このほか、個々の組み合わせ関係は不明ながらも、溝跡からは土瓶とセットで使用された、中央部に摘みを有する灰釉土瓶蓋（落し蓋）や、灰釉・鉄釉の湯呑（坏）も出土している。そして、これらの遺物の多くは完形に近しい九割以上の遺存状況を留めていることから、使用

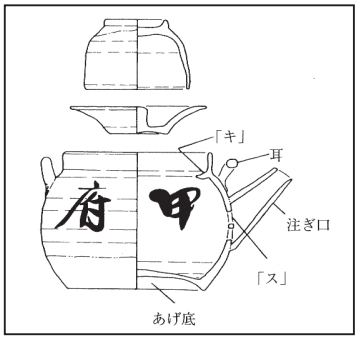








（上）図２「古くぶんじ　田中屋」銘の汽車土瓶と土瓶蓋・湯呑（宮澤 2018 より）



（右）図３　汽車土瓶部位名称（畑中編 2007 より）

後は破砕せず、そのまま溝へ投棄したものと思われる。

さて、駅名と店名を記したロクロ成形の汽車土瓶は、近代鉄道網の拡大と遠距離旅行の流行が影響して明治三〇年（一八九七）頃に登場したが、内容物が見えずに不衛生であることから、大正一〇年（一九二一）頃には使用が一時禁止されるなど、極短期間に盛行した製品でもあった（大川一九九五、畑中編二〇〇七）。明治五年（一八七二）に日本で初めて鉄道が開通した新橋―横浜間の旧新橋停車場跡（港区汐留遺跡）では、益子・信楽産を主体に常滑、瀬戸・美濃など全国各地で生産された汽車土瓶が出土しているが（福田二〇〇四）、甲府城下町遺跡の汽車土瓶は報告書によると益子産に比定されている。実際のところ、栃木県益子町の大平・滝沢窯では、鉄釉で「国分寺駅」・「古くぶんじいき」と記す灰釉の汽車土瓶を生産していた（河野二〇一三）。同窯は江戸時代末期に製陶を開始し、大正五～六年（一九一六～一七）頃まで操業していた連房式の登窯で、昭和六〇年（一九八五）に国士舘大学が行った発掘調査では灯火具・小坏・皿・湯呑・徳利・尿瓶・土瓶・鉢・甕・湯たんぽ等の製品が出土し、その大半は汽車土瓶が占めていた。

このうち駅名が判別可能な土瓶は三三種類におよび、先の「国分寺駅」のほか、「甲府」・「(甲陽軒) 米倉」銘なども確認できる（大川一九九九）。甲府城下町遺跡出土品との比較実見はしていないが、国分寺・甲府駅ゆかりの汽車土瓶が益子で製作されていたのは確かなようである。

なお、同じ溝跡ＳＤ〇一からは、「多ちかは　中村亭」銘の汽車土瓶も一点出土しており、立川駅の中村亭に由来する土瓶であると考えられる。

二．甲武鉄道の延伸と甲府駅周辺の歴史的環境

甲武鉄道が開通したのは、明治二二年（一八八九）四月で、最初に新宿―立川間の約二七㎞の操業が開始された。国分寺駅もこの時に開業している。その四か月後には八王子まで約九．七㎞延伸しているが、八王子以西は起伏の激しい関東山地を控え、鉄道の延伸はしばらく叶わない状況が続いていた（佐藤一九九一）。

また、甲武鉄道の延伸が容易に実現しなかった背景には、山梨県側の事情も絡んでいた。明治二〇年（一八八七）前後になると、山梨県でも鉄道により県外との結びつきを求める動きが高まっていった。この動きの中で設立されたのが、甲信鉄道と山梨鉄道であった。甲信鉄道は、松本（長野県）を起点とし、甲府を経て御殿場（静岡県）にいたり、東海道線と接続する計画の路線であった。一方の山梨鉄道は、甲府から八王子に抜け、甲武鉄道と接続する計画であった（加藤他二〇〇五）。

この二つの計画はいずれも実現を見なかったが、明治二五年（一八九二）に鉄道敷設法（明治二五年法律第四号）が成立すると、「予定鉄道線路」として「中央線」が組み込まれた。この時のルートは、「神奈川県下八王子若ハ静岡県下御殿場ヨリ山梨県下甲府及長野県下諏訪ヲ経テ」となっており、決定は見ていなかったが、甲信鉄道が当初想定していた東海道線に接続するルートないし、山梨鉄道が計画していた甲武鉄道に接続するルートが選択肢となっていた。これをうけて山梨県内では誘致運動が繰り広げられたが、翌二六年（一八九三）の鉄道会議で八王子ルートが採用され、二七年（一八九四）の帝国議会で正式に決定された。

しかし、同年七月に勃発した日清戦争により敷設工事は先送りされ、工事が開始されたのは二九年（一八九六）

一二月になってからであった。敷設にあたっては、山地にいくつものトンネルを掘削する必要もあり、一哩（マイル）当たりの建設費は、他の山地を通る鉄道より高額となるだけでなく、工事も難航し、ようやく三四年（一九〇一）八月に八王子―上野原間の約二二・五㎞が開通した。その後も敷設工事は続けられ、上野原―鳥沢、鳥沢―大月、大月―初鹿野（現甲斐大和）と順次延伸して、明治三六年（一九〇三）六月に初鹿野―甲府間の約一八㎞が開通し、甲府駅も開業の運びとなった。なお、甲府まで延伸した三年後の三九年（一九〇六）一〇月一日には鉄道国有法（明治三九年法律第一七号）が施行され、私設の甲武鉄道（中央本線）は買収・国有化されて国鉄所管の鉄道路線となった（老川二〇一四）。

次に、国分寺銘の汽車土瓶が甲府市内で出土した背景を発掘調査報告書に拠りながら概観しておこう。甲府駅の位置が決定したのは、明治二九年で、甲府城（舞鶴城）の一部、清水曲輪と定められた。甲府城自体は明治七年（一八七四）の太政官布告によって廃城となり、内城以外の取り壊し、堀も一部では埋め立てが進んだ。

汽車土瓶が出土した調査地点は、明治八年（一八七五）に甲府監獄署が設置された場所に相当する。約一二，六八五坪余りの敷地内には、旧米蔵を修繕した既決監獄や二階建ての未決監獄を新設したほか、表門、事務室、染物・織物・鍛冶・洋裁・木竹の各工場、炊事場、物置など様々な建物が建てられていたが（図4）、明治三六年に中央本線の初鹿野―甲府間が延伸して甲府駅も開業すると、駅前に接する監獄署の存在は商業地の発展に支障をきたすことから四五年（一九一二）に移転が決定し、大正四年（一九一五）には監獄所跡地一帯が整地区画されて市街地となり、現在に至っている。なお、汽車土瓶が出土した溝跡ＳＤ〇一は、監獄署北東隅の表門を潜った北側付近で、塀と塀に挟まれた貯水施設状の堀そのものに相当する。

県では、甲府駅の開業にともなう振興策として「山梨県の物産と観光を紹介するため」府県連合共進会を開催することが大山綱昌知事によって提唱された。この共進会は甲府駅開業の翌年、明治三七年（一九〇四）に実施する計画であったが、同年二月の日露開戦にともない延期となった（有泉二〇〇五）。

共進会の開催が再び話題に上ったのは、三八年

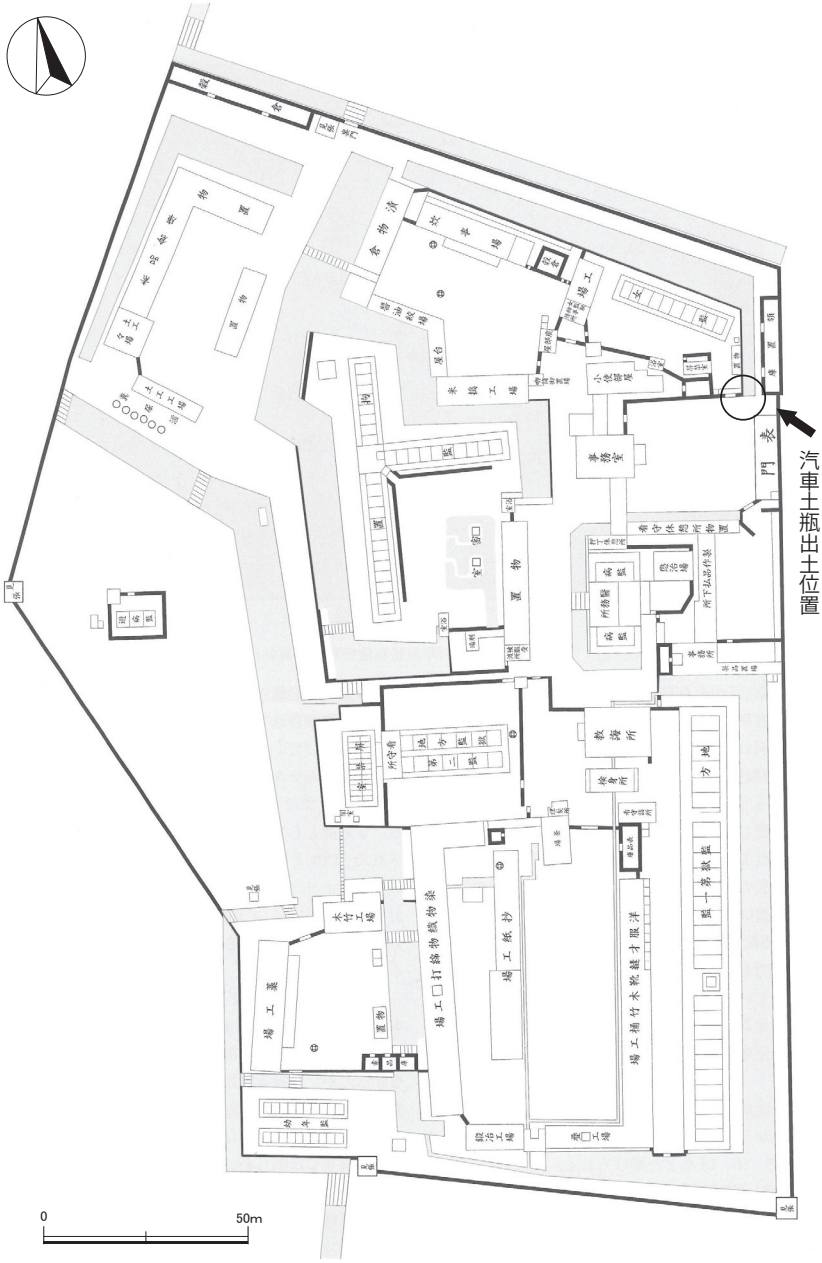


図 4　甲府監獄署と汽車土瓶の出土位置（宮澤 2018 に一部加筆　※原図は個人蔵）

（一九〇五）九月に日露戦争の講和が結ばれてからであった。しかし、戦争による傷跡も癒えぬ時期で、県内では冷害による凶作となった地域もあるなど、開催は困難な状況であったが、最終的に県は実施を決めた。

この共進会は、明治三九年一〇月一日から一一月一〇日まで開催され、甲府城跡を会場に一府九県の出品物産と参考品展示の仮設陳列館が並び、天守台には模擬天守閣が仮設され、夜はイルミネーションで飾られたという。四一日間開催された共進会の会期中の入場者は二七六，二八八人に上った。また、県内の史跡名勝探勝旅行が協賛会により計画され、景勝地の紹介にも力が注がれるなど、県内の観光振興にも一役買った。

この共進会には、多摩の人々も参加していた。北多摩郡狛江村（現狛江市）の石井正義は、同村の冨永銀之輔・石井扇吉とともに甲府を訪れ、連合共進会を見学するとともに、甲府市内および周辺を観光し、その記録を「兜宕（カヒ）ノ御嶽紀行」として書き残している（『新狛江市史資料編　近現代2』No.一九七）。これによれば、石井たちは境駅（現武蔵境駅）から午前五時五〇分発の始発列車に乗っている。紀行の中には各駅の情景にもふれており、国分寺については「国分寺駅にいたり朝日かゝやきて　国分の寺のかねの音やゝ遠く　河越行もいまや出らむ」と記している。その後、立川や八王子、上野原などを経て、正午頃に甲府へ到着した。午後には共進会の会場で「七号館廿一棟の陳列品」を見学し、この日の旅程を終えている。翌日には「御嶽の探勝にいてゝ」、昇仙峡を訪れるなど、山梨観光を満喫していた様子が窺える。

石井たちが甲府に向かう道中で汽車土瓶のお茶を口にしたかはわからない。しかし、鉄道路線が延伸し、一府九県による連合共進会などのイベントが開催されて、利用客が増加していくなかで、汽車土瓶のお茶も多くの利用者に親しまれていったのであろう。

三．中央本線の駅弁販売業者と「田中屋」

それでは、明治時代後期から大正時代初期にかけて、中央本線沿線で販売されていた駅弁に関わる幾つかの情報について、最後に触れておきたい。

昭和三三年（一九五八）に社団法人国鉄構内営業中央会が発行した『会員の家業とその沿革』（非売品）には、鉄道当局が駅構内での販売許可を与えた駅弁業者の詳細

が綴られ、中央本線で営業していた都内の駅弁業者は、新宿駅の有限会社田中屋、立川駅の株式会社中村亭、八王子駅・浅川駅（現高尾駅）の合資会社玉川亭の四駅・三社を確認することができる。

このうち、甲府城下町遺跡から出土した汽車土瓶に銘を留める中村亭は、明治二二年の甲武鉄道と立川停車場の開業時に、中村徳次郎が駅前で旅館と汽車待合所を兼ねる茶亭を構えたことを機に営業を始め、子息の平三郎が同三四年四月に鉄道会社から許可を受けて駅構内での販売店中村亭を設立した。昭和三三年当時は、ホーム立売、飲食店（中央線ホーム）、ホーム売店（南武線ホーム）、貸電話（中央線ホーム）など多角的な経営を展開し、立売品目には弁当のほか、鮨・いなり鮨・焼飯・サンドウィッチ・生牛乳・パン類・湯茶・乳製飲料などがあった。

甲府城下町遺跡の汽車土瓶に絡んでは、新宿駅に同名の田中屋が存在していることが気にかかる。この店舗に関しては、沼本忠次氏が著した『新宿駅と歩んだ田中屋の足跡』に詳しい記述があり、田中家に取材した同書を参考に概要を紹介すると、戦災等により創業当時の記録類は焼失して不明な点が多いが、明治一八年（一八八五）に赤羽―品川間で日本鉄道が開通した際、新宿駅前で乗合馬車を経営していた田中喜作が掛け茶屋を操業し、同三〇年頃に鉄道関係者の勧めで駅弁屋「万寿家（ますや）」を興したのが嚆矢と伝承されている。その後、大正九年（一九二〇）に喜作の後を継いだ二男の五平が屋号を「田中屋」と改めて以来、紀伊國屋、中村屋、高野商店と並んで新宿の町を牽引してきた老舗店であったが、平成二二年（二〇一〇）に約一〇〇年以上にもわたる構内営業の幕を閉じることになった（沼本二〇一五）。先の『会員の家業とその沿革』には、昭和三三年当時、ホーム立売で弁当・湯茶・飲料を扱ったほか、一五平米未満の手狭なホーム喫茶でも牛乳その他飲料を販売していた。

ところが、大正二年（一九一三）六月一二日の『官報』第二六〇號附録には、「合資會社登記簿第二冊第八二號」として次のような記載を確認することができる。

一商號　合資會社田中屋
一本店　豐多摩郡淀橋町大字柏木百八十四番地
一目的　國分寺驛構内立賣營業及菓子製造販賣竝ニ諸物品委託販賣其他飲食店營業旅人宿營業
一設立ノ年月日　大正二年六月一日

一代表社員ノ氏名　村主傳次郎
一社員ノ氏名住所出資ノ種類價格及責任
　金六百圓　無限　豐多摩郡淀橋町大字柏木百八十四
　　地　村主傳次郎
國分寺驛構内立賣營業權營業諸道具此價格金五百圓
及勞務
　　無限　北多摩郡國分寺村大字國分寺三百
　三十四番地　田中源次郎
金二百圓　有限　豐多摩郡杉並村大字阿佐ヶ谷二百
　十六番地　榎本平藏
金二百圓　有限　同郡千駄ヶ谷町大字千駄ヶ谷八百
　五十三番地　田中喜作
右大正二年六月三日登記　東京區裁判所淀橋出張所

この官報の記載によると、すでに大正二年の時点で合資会社田中屋は存在し、喜作も出資に加わって、国分寺駅構内で立売、菓子製造・諸物品販売、飲食店や旅館の営業申請もしていた様子が窺える。したがって、「古くぶんじ　田中屋」銘を伴う汽車土瓶は、新宿駅に拠点を置いていた田中屋が、国分寺駅で立売を許可された大正二年以降に販売した駅弁・湯茶に関わる資料であると思われる。そうであるならば、土瓶は監獄署一帯が整地・区画されるまでの大正二～四年という極めて限られた期間に生産・使用・廃棄されたことになり、遺物の年代を特定するうえで考古学的にも貴重な資料といえよう。

なお、官報には田中喜作と並んで出資した杉並村の榎本平蔵も駅構内で弁当・湯茶を販売し、その包み紙は各所に伝来している（河野二〇一五、図5）。さらに、旧国鉄新宿貨物駅舎跡が発見された新宿区千駄ヶ谷五丁目遺跡でも、「八王子　玉川亭」、「静岡」、「小山」のほか、鉄釉で「□□寺」、「榎□□」（□は欠。前者は国分寺か）銘を記す益子の汽車土瓶が出土しており、これらは玉川亭や榎本平蔵店など多摩地方の駅舎から逆に都心部へ持



図5　昭和4年榎本平蔵店弁当包み紙
（提供：泉　和夫）

たらされた遺物といえる（及川他一九九七）。

おわりに

図6に掲げた図版は、鉄道写真家の吉川速男氏が大正初年頃に国分寺駅ホームで撮影した駅弁・湯茶の立売風景である。「古くぶんじ　田中屋」銘の汽車土瓶とも年代的に近しく、往時を偲ばせる貴重な一枚といえよう。本来は市内に所在していたモノが市の区域外へと移動・流通し、現在市内には残っていない資料は数多い。本稿で取り上げた汽車土瓶もその一つである。今後の編さん事業において、市外に残る国分寺市ゆかりの資料の収集・調査に努めていく必要性を改めて感じる次第である。



図6　大正初年頃の国分寺駅ホームでの駅弁立売風景
（出典：昭和 13 年玄光社刊行『カメラと機関車』より）

小稿執筆にあたり、宮澤公雄氏や甲府市教育委員会の平塚洋一・志村憲一氏には資料の実見・借用から調査情報にいたるまで、多大なる御高配を賜りました。また、資料調査に際しては、左記の皆様方からも様々御支援や御協力をいただきました。文末ではありますが、記して御礼を申し上げます。

相澤　勝・浅見宥仁・有吉重蔵・泉　和夫・河野真理子・佐々木秀明・新海栄一・田中康雄・長佐古真也・西木浩一・羽貝正美・日髙久善・前田成東・望月　昇・両角まり・米村　創の皆様。

（文責　二：宮川、上記以外：依田）

参考文献

有泉貞夫　二〇〇五「第五章第二節　一府九県連合共進会」『山梨県史　通史編5　近現代1』山梨県

老川慶喜　二〇一四『日本鉄道史　幕末・明治篇』中公新書
大川　清　一九九五『第一回企画展　汽車土瓶』窯業史博物館
大川　清　一九九九『初期益子焼』日本窯業史研究所
大島一人他　一九九四『国分寺市の民俗四―停車場の民俗―』国分寺市教育委員会
及川　登他　一九九七『千駄ヶ谷五丁目遺跡―新宿新南口　ビル（高島屋タイムズスクエアほか）の建設事業に伴う緊急発掘調査報告書―』千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会
加藤要一他　二〇〇五「第四章第三節　交通事情の変化」『山梨県史　通史編5　近現代1』山梨県
河野真理子　二〇一三『第三三回企画展　国分寺物語　諸国国分寺を巡る旅―住田コレクションを中心として―』公益財団法人東日本鉄道文化財団　旧新橋停車場鉄道歴史展示室
河野真理子　二〇一五『第三九回企画展　駅弁むかし物語―お弁当にお茶―』公益財団法人東日本鉄道文化財団　旧新橋停車場鉄道歴史展示室
国立国会図書館デジタルコレクション『官報』大正二年八月十二日（https://dl.ndl.go.jp/pid/2952358/1/15）
佐藤正広　一九九一「第八章　甲武鉄道の開通」『国分寺市史　下巻』国分寺市
沼本忠次　二〇一五『新宿駅と歩んだ田中屋の足跡』発行：株式会社田中屋、制作：株式会社けやき出版
畑中英二編　二〇〇七『別冊淡海文庫一六　信楽汽車土瓶』サンライズ出版
福田敏一　二〇〇四『新橋駅発掘　考古学からみた近代―』雄山閣
宮澤公雄　二〇一八『甲府城下町遺跡二三（丸の内二丁目一七二一地点）―商業施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』株式会社ダイタ・甲府市教育委員会・公益財団法人山梨文化財研究所
新狛江市史編集専門員会編　二〇一六『新狛江市史　資料編　近現代2』狛江市

よだ　りょういち　ふるさと文化財課長兼市史編さん室長
みやかわ　のぶお　市史編さん室



「古くぶんじ　田中屋」・「多ちかは　中村亭」銘の
汽車土瓶と土瓶蓋・湯呑
（甲府城下町遺跡出土、資料は甲府市教育委員会所蔵）